

Guhyamanitilaka 第五章における五相成身観について

徳重弘志

はじめに

Guhyamanitilaka (*gSang ba nor bu thig le*) とは、7世紀後半から8世紀初頭頃にインドで成立したと推定される密教経典である¹⁾。本経典は、チベット語訳 (D no. 493, P no. 125) のみが現存しており、その訳者はスガタシュリー (*Sugataśrī; bDe bar gshegs pa'i dpal*) とサキャ・パンディタ (*Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251*) である²⁾。このうち、スガタシュリーは、ヴィクラマシーラ寺の最後の僧団長であるシャーキャシュリーバドラ (*Śākyaśrībhadra*) とともにチベットに入った人物の一人である³⁾。また、サキャ・パンディタは、それ以前にはチベット語訳されていなかった三つの経典を翻訳しているが、そのうちの一つが *Guhyamanitilaka* である⁴⁾。そのため、当該の経典の梵本は、シャーキャシュリーバドラやスガタシュリーによってチベットにもたらされた可能性が存在する。なお、当該の経典に対する注釈書については、存在が確認されていない。また、本経典は、広義の『金剛頂経』と呼ばれる経典群⁵⁾に属している。

さて、*Guhyamanitilaka* は五つの章から構成されている。それらのうち、第一章(1箇所)、第三章(2箇所)、第五章(1箇所)では、それぞれ五相成身観について説かれている⁶⁾。先行研究では、第一章と第三章における五相成身観については検討が行われているが、第五章に五相成身観の用例が存在することは報告されていない。その要因としては、第五章には *mngon par byang chub pa rnam pa lnga* (五相成身観) という語句が用いられておらず、当該の観想法が *gsang ba'i tshul* (秘密の仕方) と呼称されていることが挙げられる。

Guhyamanitilaka は、中期密教から後期密教への過渡期に成立しており、第

一章における五相成身観は中期密教的な内容であるが、第三章と第五章における同観想法には性的な要素が組み込まれている。そこで本稿では、同經典の第五章における五相成身観を検討することによって、中期密教から後期密教への過渡期における当該の観想法の変遷を解明する一助としたい。

1. *Guhyamanītilaka* 第五章における五相成身観

Guhyamanītilaka 第五章(D 150r5-152r7, P 113r1-115r8)は、金剛手菩薩(大毘盧遮那)と女尊たちによる問答で構成されている。本稿では、同章の全体像を確認するために、その内容を考察した上で独自の段落分けを行い、隅付括弧【 】内には通番を、角括弧[]内には適切と思われる小見出しを、丸括弧()内にはデルゲ版と北京版における当該箇所を、それぞれ示した。

- [1] [教主](D 150r5-6, P 113r1-3)
- [2] [女尊たちによる五相成身観についての請問](D 150r6-7, P 113r3-4)
- [3] [金剛手大菩薩による返答](D 150r7-v1, P 113r4-5)
- [4] [善き少女という名の女尊による五相成身観についての請問](D 150v1-2, P 113r5-6)
- [5] [金剛手大菩薩による五相成身観の説示](D 150v2-6, P 113r6-v3)
- [6] [善き少女という名の女尊による修法についての請問](D 150v6, P 113v3-4)
- [7] [金剛手大菩薩による劣った者のためのヨーガと最上のヨーガとの説示](D 150v6-151r6, P 113v4-114r4)
- [8] [女尊による誓願](D 151r6-v3, P 114r4-v1)
- [9] [金剛手大菩薩による靈薬のヨーガや修法の説示](D 151v3-152r2, P 114v1-115r1)
- [10] [金剛手大菩薩による未灌頂者への説示禁止](D 152r2-6, P 115r1-7)
- [11] [章題](D 152r6-7, P 115r7-8)
- [12] [奥書](D 152r7-v1, P 115r8-v1)

これらのうち、【2】・【3】・【4】・【5】・【7】に五相成身観に関する記述が存在するため、本稿ではそれらについて順に検討を行うことにする。

2. 五相成身観の目的

Guhyamanṭilaka 第五章では、「五相成身観の目的」に関して、以下のよう
に記されている。

【1】 [教主]

de nas bcom ldan 'das rnam par snang mdzad chen po de bzhin gshegs pa
thams cad kyi bdag po dang | rnal 'byor gyi dbang phyug de dag thams cad
dang | phyag na rdo rje'i sku dang gcig tu mdzad nas phyag na rdo rje'i skur
gyur to || de nas rgyal po chen po phyag na rdo rjes lha mo de dag thams cad
la dgyes pa dang bcas pa'i spyang gyis gzigs so ||

続いて、世尊である大毘盧遮那(*Mahāvairocana)は、一切如来の尊主〔の身体〕と、それらすべてのヨーガ行者を自在にする者〔の身体〕と、金剛手(*Vajrapāṇi)の身体とを一つになされてから、金剛手の姿になった。それから、大王である金剛手は、それらすべての女尊たちを性的欲望を具えた眼をもってご覧になった。

【2】 [女尊たちによる五相成身観についての請問]

de nas rnal 'byor ma'i dbang phyug de dag thams cad kyis | phyag na rdo rje
la bltas nas 'di skad ces smras so ||

bcom ldan 'das sems can gang **gsang ba'i tshul** la zhugs na | de dag gis
ji ltar bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub thob par
'gyur lags |

続いて、それらすべてのヨーギニーを自在にする者たち⁷⁾が、金剛手を見てから次のように説いた。

「世尊よ、ある衆生が**秘密の仕方**(五相成身観)に参入したならば、そ

の者たちはどのように無上なる等正覚を獲得するのでしょうか？」

【3】 [金剛手大菩薩による返答]

de nas byang chub sems dpa' chen po phyag na rdo rjes de dag la 'di skad
ces bka' stsal to ||

sngon spyad pa'i gsang ba'i tshul gyis sangs rgyas nyid bsgrub par
bya'o ||

続いて、金剛手大菩薩は、それら〔の女尊たち〕に次のようにお答えになっ
た。

「以前に行った秘密の仕方(五相成身観)によって、仏の位(*buddhatva)
を成就すべきである」

以上のように、【2】では「秘密の仕方」によって「無上なる等正覚を獲得」
できることが、【3】では「以前に行った秘密の仕方」によって「仏の位を成就」
できることが明示されている。なお、当該箇所のみでは、「以前に行った秘密
の仕方」とは何かが判然としないが、以下に提示する *Guhyaṃāṇitilaka* 第三
章の記述⁸⁾を踏まえると、五相成身観のことを指していることが理解できる。

ji ltar bshad pa'i las rnams byed do || rtag tu bzlas na 'chi ba las rgyal bar
'gyur ro || lag na rdo rje 'di dag ni sgyu 'phrul chen mo zhes bya ba'i rig pa
sgrub pa'i thabs dang bcas pa ste | tshul 'di nyid kyis 'jig rten thams cad
dbab par bya'o || 'di ni nyan thos kyi theg pa pa rnams skrag par byed pa'i
rig pa ste | sangs rgyas nyid sgrub par byed pa ma yin no || sngags kyi sgrub
pa 'ga' zhig gis sangs rgyas nyid sgrub par byed pa cung zad kyang med la |
'on kyang sgom pa'i rim pas yin no || **gsang ba'i tshul dang ldan pa'i sgom
pa'i rim pa** des 'grub par 'gyur ro || lag na rdo rje des na 'jig rten pa dga' ba'i
phyir dngos grub phra mo 'di sngags pas bsgrub par bya ste | sangs rgyas
kyi phyir ma yin no ||

「以上のように説かれた諸修法をなす[べきである]。[マハーマーヤーという明呪を]常に念誦したならば、死に打ち勝つであろう。金剛手よ、これら[の諸修法]がマハーマーヤーという明呪を成就する方法を有して、まさにこの仕方をを用いて、あらゆる世界の住人を服従させるべきである。[ただし、]これ(マハーマーヤーという明呪)は、声聞乗の者たちを恐怖させる明呪であって、[真言行者が]仏の位を成就する[明呪]ではない。[すなわち、]何らかの真言の成就によって[真言行者が]仏の位を成就することは少しもないが、しかしながら、[仏の位を成就するための]修習次第は存在する。以下の、**秘密の仕方を備えた修習次第**によって、[仏の位を]成就するであろう。金剛手よ、それ故に、世間の人々が喜ぶために、この[マハーマーヤーの]浅薄な成就を真言行者は成し遂げるのであって、仏の[位を成就する]ためではない」。

以上の引用文は、*Guhyamanītilaka* 第三章における「マハーマーヤーの明呪と修法」の末部であり、第三章ではこの文章の直後から五相成身観が説かれはじめる。そのため、徳重[2019a: 92]で既に指摘したように、ここでの「秘密の仕方を備えた修習次第」とは、五相成身観のことを指していると判断することができる。また、当該箇所では、「秘密の仕方を備えた修習次第」によって「仏の位を成就」できることが明示されている。

さて、先述したように、*Guhyamanītilaka* 第五章の【3】では、「以前に行った秘密の仕方」によって「仏の位を成就」できることが明示されていた。同経典の第三章の記述を踏まえると、【3】における「以前に行った秘密の仕方」とは、五相成身観のことを指していると判断することができる。つまり、*Guhyamanītilaka* における「五相成身観の目的」とは、仏の位を成就することである。

3. 五相成身観の内容

Guhyamanītilaka 第五章では、「五相成身観の内容」に関して、以下のよう
に記されている。

[4] [善き少女という名の女尊による五相成身観についての請問]

de nas gzhon nu ma bzang mo zhes bya ba'i rnal 'byor ma'i dbang phyug gis
thog ma dang tha ma med pa'i bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to ||

sems can de dag gis **bha ga bsten pa tsam gyis sangs rgyas nyid bgyid
dam** | yang na **de'i gsang ba bsgoms pas lags** |

続いて、善き少女(gZhon nu ma bzang mo)⁹⁾という名のヨーギニーを自在にする者は、無始無終の世尊に次のように申し上げた。

「それらの衆生は、女陰(*bhaga)を抛り所にしただけで仏の位になれるのでしょうか？ あるいは、その秘密[の仕方](五相成身観)を修習したことによってでしょうか？」

[5] [金剛手大菩薩による五相成身観の説示]

de nas rgyal po chen po phyag na rdo rjes de dag la 'di skad ces bka' stsal to ||

bsgom pa'i rim pas bsgrubs te phyi nas rnam par rtog pa med pa'i
sems kyis bsten nas bdag nyid phyag na rdo rje'i sku'am | rnam par
snang mdzad kyi sku'am | 'jig rten dbang phyug gi sku'am | rdo rje hūm
mdzad kyi sku'am | 'dod pa'i lha'i sku bsgrub par bya'o || **rtsa de'i 'o ma
las zla ba'i dkyil 'khor gyi rnam pa bsgoms la** | **zla ba'i dkyil 'khor de
las bdag nyid rdo rje sems dpa'i sku'am** | **rang gi lha'i skur bsgom
par bya'o** || rtsa de nyid kha dog nag por bsams nas de las bdag nyid
rdo rje hūm mdzad kyi skur bsgom par bya'o || rtsa de nyid dmar skya'i
rnam pa'i rim pa de nyid kyis bsgoms nas bdag nyid 'jig rten dbang
phyug gi skur las kyi dbye bas bsgom par bya'o || rtsa de nyid kha dog
sngo bsangs nam mkha' lta bur bsgoms nas rdo rje rnon po'i skur
bsgoms na | de nas las kyi dbye bas rtsa de dag gi sbyor bas bdag nyid
bsgoms na des gdon mi za bar 'grub par 'gyur ro || de nas **sngags pa des
thun mtshams bzhir sems gzhan du ma yengs par bsgoms pa nyid
kyis zla ba drug nyid na 'grub par 'gyur ro** ||

続いて、大王である金剛手は、それら[の女尊たち]に次のようにお答えになった。

「[秘密の仕方を備えた]修習次第(五相成身観)を通じて[目的を]達成して、[行者自身が]外界と区別なき心で拠り所になってから、[行者]自身が金剛手の姿か、毘盧遮那の姿か、世自在(*Lokēśvara, 観音)の姿か、ヴァジュラフーンカーラ(*Vajrahūmkāra)の姿か、あるいは守護尊(*sveṣṭādevatā)の姿を成就すべきである。[具体的には、]その脈管(*nāḍī)の中の乳白色(精液)から月輪の形象を観想した後に、その月輪から[行者]自身を金剛薩埵(*Vajrasattva)の姿か、あるいは守護尊の姿として観想すべきである。[あるいは、]まさにその脈管[の中の液体]を黒色[の月輪]¹⁰⁾として思念してから、その[月輪]から[行者]自身をヴァジュラフーンカーラの姿として観想すべきである。[あるいは、]まさにその脈管[の中の液体]を桃色の[月輪の]¹¹⁾形象という次第自体によって観想してから、[その月輪から行者]¹²⁾自身を世自在の姿として修法の区分によって観想すべきである。[あるいは、]まさにその脈管[の中の液体]を虚空のような深青色[の月輪]¹³⁾として観想してから、[その月輪から行者自身を]¹⁴⁾金剛利(*Vajratikṣṇa, 文殊)¹⁵⁾の姿として観想した後に[成就するであろう]。さらに、修法の区分によって、それらの脈管のヨーガで[行者]自身が観想したならば、それによって[守護尊の姿を]¹⁶⁾確かに成就するであろう。それから、その真言行者は、[修行の]四座において心を他に向けずに観想することだけで、まさに半年の間に[仏の位を]¹⁷⁾成就するであろう」

第一に、【5】では五相成身観の具体的な内容が説かれているが、【4】における質問に対する直接的な返答はなされていない。ただし、【4】に対する返答となり得る文章が、Guhyaṃāṇītilaka 第三章には以下のように記されている¹⁸⁾。

bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa |

lag na rdo rje phyi rol du gnas pa'am | phyi rol gyi tshul gyis sam | bha
ga bsten pa tsam gyis byang chub sgrub par nus pa ma yin te | 'on
kyang sbyor ba 'dis gal te bha ga bsten na de ni mngon par byang
chub pa rnam pa lnga sgom pa por 'gyur ro ||

世尊はお答えになった。

「金剛手よ、〔女陰の〕外部に住することや、外部の仕方や、女陰を抛
り所とすることのみによって、菩提を成就することはできないのであ
る。しかし、このヨーガによって、もし女陰を抛り所とするならば、
彼(真言行者)は五相現等覺(五相成身觀)を修習する者になるであろう」

以上のように *Guhyaṃāṇītilaka* 第三章には、性交を行わない場合や、ただ
単に性交を行うだけの場合には、五相成身觀を修習することはできず、ヨーガ
を行いながら性交する必要があると記されている。そのため、【4】における請
問に対しては、「女陰を抛り所にしただけ」では仏の位を成就することはでき
ないという返答が想定される。

第二に、【5】においては、五相成身觀の五段階の修習のうち、①「通達菩提
心」(その脈管の中の乳白色から月輪の形象を觀想した後に)と、③「成金剛心」(そ
の月輪から〔行者〕自身を金剛薩埵の姿か、あるいは守護尊の姿として觀想すべきで
ある)のみが言及されている。その要因としては、*Guhyaṃāṇītilaka* 第三章に
おいて「五相成身觀」の五段階の修習が既に説かれているため、第五章におい
ては同一の修習に関する記述が簡略化されたのだと推測することができる。同
經典の第三章には、五相成身觀について以下のように記されている¹⁹⁾。なお、
①「通達菩提心」、②「修菩提心」、③「成金剛心」、④「証金剛身」、⑤「仏身
円満」という五段階との対比を容易にするために、テキストと和訳には①～⑤
という数字を付した。

① lag na rdo rje des rtsa'i zhu bas bdag nyid zla ba'i dkyil 'khor gyi
rnam par blta bar bya'o || ② yang byang chub zla ba'i tshul dang rtsa

thams cad gcig tu byas te | bdag nyid byang chub zla bar bsgom par
bya'o || ③ 'o ma de las bdag nyid rdo rje'i gzugs su bsams la | de las
yang rdo rje sems dpa'i skur rnam par bsgom par bya'o || ④ yang
thams cad lhan cig gcig tu gyur pa las de bzhin gshegs pa thams cad
kyi skur bsgom par bya'o || ⑤ de de bzhin gshegs pa thams cad kyi
bdag po rnam par snang mdzad chen po dang mtshungs par 'gyur ro ||
「①金剛手よ、それによって、〔すなわち〕脈管(*nāḍī)の中の液体によ
って、〔行者〕自身を月輪の形象として観察すべきである。②さらにま
た、月の形をした菩提とすべての脈管〔の中の液体〕とを一つにした後
に、〔行者〕自身を菩提の月(第二の月輪)として観想すべきである。③
その乳白色(精液)から、〔行者〕自身を金剛杵の形として観想した後に、
それ(金剛杵)からさらに、〔行者自身を〕金剛薩埵の姿として観想すべ
きである。④さらにまた、すべて(月輪・菩提の月・金剛薩埵)が一体と
なってから、〔行者自身を〕一切如来の姿として観想すべきである。⑤
彼(一切如来となった真言行者)は、一切如来の尊主である大毘盧遮那と
等しくなるであろう」

このように、Guhyaṃaṇītilaka 第三章と第五章とにおける「五相成身観の内容」は、脈管の中の精液によって月輪を観想した上で、行者自身を金剛薩埵の姿として観想するという点では共通している。

さて、【5】では五相成身観によって仏の位を成就するために必要な期間が「半年」とであると明示されているが、これと同様のことが【7】でも説かれている。なお、【7】では鉤召法・敬愛法・五相成身観について説かれているため、それらのうちの五相成身観の箇所(D 151r4-6, P 114r1-4)のみを以下に引用する。

【7】 [金剛手大菩薩による劣った者のためのヨーガと最上のヨーガとの説示]
mchog gi sbyor bas dman pa la mi bya zhing dman pa'i sbyor bas
mchog la mi bya ste dam tshig nyams par 'gyur ro || dman pa'i sbyor

bas mchog bsgrub par nus pa'ang ma yin te yan lag ma yin pa'i phyir ro
 || de nas phyogs 'ga' zhig tu gnas te nyin mtshan du gsang ba bsten
 par byas na zla ba drug kho na la 'grub par 'gyur zhing bskal pa'i
 dngos po dag kyang mthong zhing ring du gnas pa'i ngag dag kyang
 thos la ji srid sangs rgyas nyid kyang thob par 'gyur ba 'di la the
 tshom med do || ji ltar rdo rje sgeg mo'i rigs kyi lha mo chen mo'i sgrub
 thabs ltar rdo rje sgeg mo'ang de bzhin du thams cad sngon gyi rim
 pas bsgrub par bya'o || sbyor ba 'di nyid kyis rnal 'byor ma'i dbang
 phyug de rnams kyang bkug la bsten par bya'o ||

「最上のヨーガによって劣ったもの(鉤召や敬愛の修法)をなすべきではなく、劣った者のためのヨーガ(微細な音声のヨーガ)によって最上[の観想法である五相成身観]をなすべきではない。[さもなければ]誓戒が損なわれることになる。劣った者のためのヨーガは、最上[の観想法である五相成身観]を成し遂げることもできず、[その五段階のうち]の一部を[成し遂げることすらでき]ないのだから。さらに、ある場所に住して、昼夜に秘密[の仕方](五相成身観)を拠り所にするならば、半年だけで[最上のヨーガを]成就するとともに、永劫なる諸々の事物をも目の当たりにしつつ、長きにわたり存続する諸々の言葉をも耳にする限りにおいて、仏の位をも獲得することは、ここにおいて疑いはない。金剛嬉(*Vajralasyā, インドラーニー)²⁰の部族に属する偉大なる女尊の成就法の通りに金剛嬉をも[成就すべきであり]、同様に、すべて[の尊格]を前述の[秘密の仕方を備えた修習]次第(五相成身観)によって成就すべきである。まさにこの[最上の]ヨーガによって、それらのヨーギニーを自在にする者をも鉤召して、拠り所にすべきである」

以上のように、*Guhyamanitilaka* 第五章の【5】と【7】には、五相成身観を「半年」おこなうことで仏の位を成就できると説かれている。ただし、仏の位を成就するために必要な期間に関しては、これとは異なる見解が同経典の第三章に

は以下のように記されている²¹⁾。

lag na rdo rje des na tshul 'dis bud med bsgom pa na gal te rmi lam du
rdo rje sems dpa' dbang bskur bar mdzad na de nas zla ba phyed tshun
chad du 'grub par shes par bya'o ||

「金剛手よ、それ故に、この仕方(五相成身観)で〔ヨーガを備えた〕女性を観想する時、もし〔その日の〕夢において金剛薩埵が〔行者自身に〕灌頂をなされたならば、それに基づいて半月以内に〔仏の位を〕成就すると知るべきである」

つまり、*Guhyamanītilaka* においては、五相成身観によって仏の位を成就するために必要な期間は、夢に金剛薩埵が現れた場合は「半月以内」であり、夢に金剛薩埵が現れなかった場合は「半年」ということになる。

おわりに

本稿では、*Guhyamanītilaka* 第五章における五相成身観について、その目的と内容という二つの観点から考察を行った。

第一に、「五相成身観の目的」に関しては、仏の位を成就することであると同経典には説かれている。第二に、「五相成身観の内容」に関しては、時代的に先行する『真実撰経』などには見られない特徴として、女陰の中に放出した精液から金剛薩埵の姿を観想するというプロセスが存在している。なお、これら二つの点は、同経典の第三章と共通するものである。

ただし、五相成身観によって仏の位を成就するために必要な期間に関しては、夢に金剛薩埵が現れた場合は「半月以内」であると第三章には記されているが、夢に金剛薩埵が現れなかった場合は「半年」であると第五章では規定されている。このように、第五章における五相成身観に関する記述は、第三章における同一の観想法を補う内容を含んでいることから、中期密教から後期密教への過渡期における当該の観想法の変遷を解明するための重要な手掛かりと言えよう。

略号表

- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka(デルゲ版チベット大蔵経)
n. note(注記)
P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka(北京版チベット大蔵経)
r *recto*(写本・版本の表面)
v *verso*(写本・版本の裏面)

参考文献

酒井眞典

- [1985]「五相成身観のチベット伝訳資料」『酒井眞典著作集』3, 法蔵館: 3-22.

田中公明

- [1997]『性と死の密教』春秋社.

徳重弘志

- [2016]『『金剛頂経』第十一会について』『印度学仏教学研究』65(1): 370(155)-365(160).

- [2017]『『金剛頂経』第二・三会と第十一会の関連性について』『密教学研究』49: 51-63.

- [2018a]「*Guhyaṃāṇītilaka*におけるマハーマーヤーについて—第三章の校訂テキストおよび和訳—」『高野山大学大学院紀要』17: 35-58.

- [2018b]「*Guhyaṃāṇītilaka*における「四種法」について—第四章の校訂テキストおよび和訳—」『高野山大学密教文化研究所紀要』31: 100(1)-83(18).

- [2019a]「*Guhyaṃāṇītilaka* 第三章における五相成身観について」『密教学研究』51: 89-100.

- [2019b]「*Guhyaṃāṇītilaka*におけるシヴァとインドラに対する調伏の差異」『印度学仏教学研究』68(1): 355(194)-350(199).

野口圭也

- [1986]「Samputodbhavantra と『秘密相経』」『豊山学報』31: 80(39)-56(63).

羽田野伯猷

- [1986]「Kāsmīra-mahāpaṇḍita “Śakyaśribhadra” —チベット近世仏教史・序説—」『チベット・インド学集成』1, 法蔵館: 239-258.

堀内寛仁

- [1974]『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究: 梵本校訂篇』下, 密教文化研究所.

- [1983]『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究: 梵本校訂篇』上, 密教文化研究所.

Rhoton, Jared Douglas

- [2002] *A Clear Differentiation of the Three Codes: Essential Distinctions among the Individual Liberation, Great Vehicle, and Tantric Systems*. New York: State University of New York Press.

Tribe, Anthony

[2019] *Tantric Buddhist Practice in India: Vilāsavajra's commentary on the Mañjuśrī-nāmasaṃgīti: A critical edition and annotated translation of chapters 1-5 with introductions*. London and New York: Routledge.

(当該の書籍は、2016年にハードカバーで、2019年にペーパーバックで、それぞれ刊行されている。本稿では、そのうちの後者を参照した)

注

- 1) 第一に、先行研究においては、五相成身観の発展段階を根拠として、*Guhyaṃaṇṭilaka* が成立した時期は『真実撰経』(D no. 479, P no. 112)と *Hevajratāntra* との間であると指摘されている (Cf. 徳重 2017: 54)。第二に、*Guhyaṃaṇṭilaka* における「降三聖明王の諸天調伏譚」が、『大日経疏』(大正 no. 1796)を講述した善無畏(637-735)によって参照されていた可能性があり、その推測が妥当であるならば、同経典の成立年代は善無畏が長安に到着した開元四(716)年よりも前ということになる (Cf. 徳重 2019b: 351 (198)n. 8)。第三に、*Guhyaṃaṇṭilaka* という経典名が、8世紀後半から9世紀中頃までの間に編纂された *Nāmamantrārthāvalokīnī* に言及されていることから、同経典は8世紀には何らかの形で成立していたと推定できる (Cf. Tribe 2019: 376, 378)。以上のことを総合すると、*Guhyaṃaṇṭilaka* の成立年代は、7世紀後半から8世紀初頭頃であると推定できる。なお、*Nāmamantrārthāvalokīnī* における用例については、杉木恒彦氏(広島大学教授)からご指摘いただいた。記して謝意を表します。
- 2) *Guhyaṃaṇṭilaka* 第五章の【12】[奥書]には、翻訳者について以下のように記されている。なお、本稿で提示した同章における【1】～【12】の校訂テキストおよび和訳は、近刊拙稿「*Guhyaṃaṇṭilaka* 第五章のチベット語訳校訂テキストおよび和訳」(『高野山大学密教文化研究所紀要』第36号に収録予定)から抜粋した。ただし、煩雑なることを避けるために、本稿では当該箇所の変読に関しては割愛した。

dam pa'i rgyud 'di gangs can 'di na sngon ||
rnam pa kun tu bsgyur ba ma rnyed nas ||
mkhas pa bde bar gshegs pa'i dpal dang ni ||
sgra rig kun dga' rgyal mtshan bdag gis bsgyur ||

この最高のタントラは、この雪山(チベット)において、以前[には]あらゆる種類[で]翻訳された[形跡]が見いだせないために、パンディタ(*paṇḍita)であるスガタシュリー(*Sugataśrī)と、文法学者である私、[すなわち]クンガ・ギェルツェン(サキヤ・パンディタ)とが翻訳した。

dam pa'i bkas bskul nas ni gus pa yis ||
dpal ldan sa skya'i gtsug lag khang du bsgyur ||
dge ba 'di yis sems can thams cad kyes ||

gsang don rtogs nas sangs rgyas sar 'gro shog ||

最高の教えによって喚起されてから、[それを]信仰する者が、吉祥なるサキヤ寺において[この経典を]翻訳した。この善によってすべての衆生が、秘密[の]意味を理解してから、仏地に到達しますように。

- 3) 詳細については、羽田野[1986: 243]を参照。
- 4) 詳細については、Rhoton[2002: 207]を参照。
- 5) 当該の経典群の梗概を伝える文献は、不空(705-774)が翻訳あるいは撰述した『十八会指帰』(大正 no. 869)のみである。この一群に属する経典については、徳重[2018b: 90(11)n. 5]を参照されたい。
- 6) *Guhyaṃāṇitilaka* 第一章における五相成身観については、酒井[1985]、野口[1986]、田中[1997: 40-49, 86-98]を参照。他方、同経典の第三章における当該の観想法については、徳重[2019a]を参照されたい。
- 7) ここでの「すべてのヨーギニーを自在にする者たち」とは、*Guhyaṃāṇitilaka* 第四章における「善き少女」(gZhon nu ma bzang mo)、「情欲によって錯乱する女性」(Dod pas myos ma)、「金色の瞳を有する者」(gSer gyi mig can)、「あらゆる楽を喜ぶ者」(bDe ba thams cad la dga' ba)という四人の女尊たちを指していると判断することができる。なお、これら四人の女尊たちは、時代的に先行する『真實撰経』や『理趣広経』(D nos. 487-488, P nos. 119-120)には登場せず、後期密教時代のマンダラ儀軌である *Vajrāvali* にも記されていない。そのため、個々の女尊のサンスクリット名や、それぞれの詳細な特徴については不明である。また、第四章全体の校訂テキストおよび和訳については、徳重[2018b]を参照されたい。なお、徳重[2018b]の時点では、Dod pas myos ma を「貪欲によって酔う女性」と翻訳していたが、この場を借りて「情欲によって錯乱する女性」に訂正させて頂きたい。
- 8) 当該箇所(D 145v1-3, P 107v4-7)の校訂テキストは、徳重[2018a: 41]から抜粋した。ただし、煩雑になることを避けるため、本稿では当該箇所の異読や注記に関しては割愛した。また、和訳に関しては、徳重[2018a: 44-45]で提示した訳語のうち幾つかの箇所を修正した。
- 9) 先述したように、この「善き少女」(gZhon nu ma bzang mo)という女尊は、*Guhyaṃāṇitilaka* 第四章にも登場する(Cf. 徳重 2018b: 95(6)-94(7))。なお、当該の語句は、「カウマーリー」(gZhon nu ma; *Kaumāri)と「スバドラ」(bZang mo; *Subhadrā)という二人の女尊を指す可能性も存在するが、同経典の第四章では北方のヨーギニーたちを代表する一人の女尊として扱われているため、第五章でも一人の女尊を意図していると判断した。
- 10) 直前の箇所には、脈管の中の精液から月輪を観想し、その月輪から尊格を観想するという修法が説かれている。そのため、その直後に位置する当該箇所においても同様の手順で観想法が行われると推定できるため、そのことを根拠として語句を補った。

- 11) 直前の文章を根拠として、語句を補った。
- 12) 直前の文章を根拠として、語句を補った。
- 13) 直前の文章を根拠として、語句を補った。
- 14) 直前の文章を根拠として、語句を補った。
- 15) 「金剛利」とは、『真実撰経』における十六大菩薩の一人である (Cf. 堀内 1983: §§ 95-100)。
- 16) 直前の文章を根拠として、語句を補った。
- 17) 【3】と【4】における記述を根拠として、語句を補った。
- 18) 当該箇所 (D 146r4-5, P 108v1-2) の校訂テキストおよび和訳は、徳重 [2019a: 93-94] から抜粋した。ただし、煩雑になることを避けるため、本稿では当該箇所の異読や注記に関しては割愛した。
- 19) 当該箇所 (D 146r5-7, P 108v2-4) の校訂テキストは、徳重 [2019a: 94] から抜粋した。また、和訳に関しては、徳重 [2019a: 94-95] で提示した訳語のうち幾つかの箇所を修正した。
- 20) *Guhyaṃaṇṭilaka* 第三章における「降三世明王の諸天調伏譚」では、「インドラの後」の金剛名が「金剛嬉」であると記されている (Cf. 徳重 2019b: 354(195)-353(196))。
- 21) 当該箇所 (D 147v5-6, P 110r5-6) の校訂テキストは、徳重 [2019a: 97] から抜粋した。また、和訳に関しては、内容の理解を容易にするために、徳重 [2019a: 97] で提示した文章に一部の語句を補った。

(令和4年度科学研究費[21K12846]による研究成果の一部。本稿作成にあたっては、菊谷竜太氏に翻訳に関するご教示を頂いた。記して謝意を表したい。)

〈キーワード〉 *Guhyaṃaṇṭilaka*、五相成身観、五相現等覚、pañcākārābhisambodhi-krama

令和五年三月

密 教 学 研 究

第五十五号

日 本 密 教 学 会

目次

第五十五回学術大会記念講演

戦後空海像の変遷……………

松長 有慶…………… 一

明恵『解脱門義』に見る修行の階梯……………

米澤実江子…………… 三

— 図印の解釈を中心として —

仁和寺における伝法院流相承をめぐって……………

赤塚 祐道…………… 三

『五智五藏等秘密抄』における五藏観……………

城光寺邦信…………… 五

(横組)

『理趣広経』『真言分』の蔵漢比較について……………

田中 公明…………… 一

— 『普賢瑜伽』『勝初瑜伽』との関係を中心に —

空性と本尊瑜伽の関係性について……………

平岡 宏一…………… 三

— ゲルグ派における秘密集会聖者流の場合 —

密教經典の成立史……………

杉木 恒彦…………… 三

— 近年の国内外の研究成果を総括する —

サンヴァアラ系諸文献を収録する一帙の梵語写本について……………倉西 憲一……………六一

—スコイエン・コレクシオン MS2170 収録文献—

Guhyanantika 第五章における五相成身観について……………徳重 弘志……………七五

『一切悪趣清浄儀軌』の改編について……………名取 玄喜……………九二

—いわゆる『九仏頂タントラ』の典拠と編纂意図の考察—

「勤王僧」像の形成と展開……………高橋 秀慧……………一〇九

—僧月照の顕彰を事例として—

無量寿院長覚の信解因果……………山本 昌芳……………一三五

—中世真言教学における「信解」解釈—

(書 評)

北尾隆心著『菩提心論の解明』……………大塚 伸夫……………七九

新刊紹介(横組)………………………………………………………………………………一三九

令和三年度第二十八回日本密教学会賞受賞者及び審査報告書…………………………………………………………………九二

事業報告・事業計画……………………………………………………………………………………………九三

決算書・予算書……………………………………………………………………………………………一〇八

会則・施行細則……………………………………………………………………………………………九六

投稿規程……一〇三

No. 55

March 2023

MIKKYŌGAKU KENKYŪ

THE JOURNAL of ESOTERIC BUDDHIST STUDIES

Edited

by

NIPPON MIKKYŌ GAKKAI

‰ SHINGONGAKU CHISAN KENKYŪSHITSU

TAISHŌ UNIVERSITY

No.20-1, 3 CHŌME NISHISUGAMO, TOSHIMA-KU,
TOKYO JAPAN

Contents

- Myoe's View on the Path of the Practice in "Gedatsumongi".
.....Mieko YONEZAWA.....(21)
- A study on inheritance of lineage in Denboin at Ninnaji Temple.
.....Yudo AKATSUKA.....(37)
- A study of the view of the five viscera in "Gochigozotohimitsusho".
.....Hoshin JOKOJI.....(57)
- Muryōjuin Chōkaku's Idea of Shinge-Inga.
.....Masayoshi YAMAMOTO.....(125)
- Formation and Development of "the Loyalist Monk (勤王僧)": Focusing on Gessyo (月照) and his honorary movement.
.....Shukei TAKAHASHI.....(109)
- On the Source and the Intention of compilation of the *Sarvadurgatipariśodhanatantra* (VersionB).
.....Genki NATORI.....(91)
- Pañcākārābhisambodhi-krama in the Fifth Chapter of the *Guhyaṃāṇītilaka*.
.....Hiroshi TOKUSHIGE.....(75)
- A Sanskrit Composite Manuscript from Nepal in the Schøyen Collection.
.....Kenichi KURANISHI.....(61)
- Chronology of the Buddhist *Tantras*: A Summary of the Findings by the Japanese and Overseas Scholars in Recent Decades.
.....Tsunehiko SUGIKI.....(37)

On the Relation between the View of Emptiness and Deity Yoga, as Manifested
in *Guhyasamāja* Lineage of *Nāgārjuna* by the Gelug Sect.

.....Koichi HIRAOKA..... (21)

A Comparative Study of the Tibetan and Chinese Translations of the Mantra-
khaṇḍa of the *Paramādyā-tantra*: With a Focus on Its Relationship with the
Samantabhadra-yoga and Paramādyā-yoga of the Eighteen Assemblies of the
Vajraśekhara Cycle.

.....Kimiaki TANAKA..... (1)